

月刊

# いじろのとも

第七卷

十月号

叱らない

叱ったら

萎縮するから

叱らない

権威わからぬ

人間作りぬ

叱るのは

学校だけと

子どもたち

教師に反抗

平気のへいさ

気付いても救われぬ

自己の垢

気付いただけで

救われぬ

ひたすらこころ

磨かなければ

コオロギ

コオロギの

出迎え受けて

登る坂

# 人生を考え直して

## みたい人は(三四)

『聖書』解説(一〇)

マタイ福音書の第五章を続けます。

一四あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。

一五また、あかりをつけて、それを柀の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。

一六このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

先月号は、「あなたがたは、地の塩です。」ではじめる一三節を解説しました。この一四節は、「あなたがたは、世界の光です。」ではじまっています。先月号で指摘しましたように、地は天と対をなしていました。その天が実は、この一四節なのです。

先月号の一三節の解説で、キリストは、「私たちが塩

であるとは、私たちが、天に居られる神の摂理をこの地で行うものとして存在しているのだ」とおっしゃっているのだと解釈しました。

ということは、ここでの「世界の光」とは、天の光であると言えます。因みに、この世界という言葉の原語は、手島郁郎著『マタイ伝講話』第二巻一四頁によりますと、宇宙、つまり天という意味のようです。

では、このように、あなたがたは、天の光ですとは、何のことなのでしょう。どうもこれが、どの解説書を見ましても、分かっていないように思われます。

私は、この文章を読みますと、直ちに「大日如来」を連想します。仏教の真言密教では、この世界は大日如来の自己顕現だとします。ですから、私たちは、みんな大日如来の現れなのです。私の理論では、自分の中にある「他己」の無意識に如来を宿しているのです。それを仏教では「如来蔵識」と呼んでいます。

私たちが天の光であるとは、このことを言っているのです。私たちが、天に居られる神の摂理をこの世で行う「地の塩」となれる根拠は、私たちが同時に「天の光」だからなのです。

天の光を、私たちは、みんな自分の心の中に宿しています。その天の光が輝くようにさえすれば、私たちは、

地の塩となることができます。

少し横道にそれるかも知れませんが、先月号で述べましたように、パウロが布教し、確立しましたキリスト教では、人は原罪を背負って生まれ、精神には神が宿っているのに、肉体には悪魔が宿り、精神で神の摂理をなさんとしても、肉体が悪をなしてしまう、と考えます。人間に出来ることは、ただ、神の前で悔い改め、無限の愛をもった神の許しを得ることだけだとするのです。

現在のように、自己を肥大化させた時代では、悪をなしても、こうして、たとえ宗教の世界だといつても、ただ神の許しを乞うだけで許されますと、客観的には、ますます悪がこの世に蓄積され、末法の世は加速して行くと言えます。

ここから、救われる道は、キリストを信じる者は、肉体の悪魔を追い出して、精神が欲するままに、肉体が精神に従うようにならなければなりません。仏教で言いますと、弘法大師が師の恵果和尚を評して言われましたように、「行住坐臥が法にかなう」ようにならなければなりません。そうしないと、人など照らすことはできないのです。

いまは、たとえそうなった人がいても、人々は個に閉じ、他己を弱めて、それが分からなくなっています。自

分の損得や好き嫌い（情動）に執られて、間違つたもの、悪なるもの、邪なるものを信じて、正しいもの、善なるもの、聖なるものを信じる力を失っています。たとえキリスト教や仏教の信者であろうと、俗聖逆謗をして、それに気づきもしません。大事業家になったり、大政治家になったり、ノーベル賞をもらった人が偉いぐらいにしか考えられないのです。

パウロの説いたキリスト教を信じてきたヨーロッパの文明が、いま世界を席卷し、世界を滅亡へと誘導しているように、私には思われます。それから救われるには、キリスト教がパウロの考えたキリスト教から変わらなければなりません。キリストがユダヤ教を革新したように、キリスト教の革新がいるのです。私も、それを願ってこれを書いていきます。これまで述べてきたことは全てその試みですが、ここで言いますと、「あなたがたは、天の光」だということばの解釈もそうなっているのです。

キリストがそうでありましたように、私たちも一人ひとりが、心に光を宿しています。キリストのように、その心の光が光らないのは、「自己」に閉じ、自己の好き嫌い（食欲・性欲・出世欲など）や損得という、自己への執らわれの雲によって心が覆われてしまっているからなのです。その雲は、かつて直径十キロの隕石が地球に

落ち、暗黒の雲が地球全体をおおってしまつて、あの巨大な恐竜さえが滅亡してしまつたように、厚く厚く、人の心を覆つてしまつていゝのです。このままですと、恐竜と同じように、人間もその雲で、心が不毛になり、やがて滅亡せざるを得なくなつて行きます。

天とは高いところを言います。ですから、天の光は高いところで光ります。雲さえなければ、誰でもが見ることができのです。「山の上にある町は隠れることができない」ということです。

また、「あかりは燭台の上に置かれます」。高いところに置かれます。そうすることで、多くの人が照らされます。しかし、いま、キリストの光はほとんど、人々の心を照らしていません。パウロがキリストの光をちゃんと感じられなかつたのは、パウロが個に閉じていたからだと思ひますが、しかし、当時は、他己社会への移行期で、人々が何か自分を越えたものを信じる力をだんだんと強めていきましたので、多くの人がキリストやパウロを信じることができたのです。

でも、今は、違います。何度も書きますように、自己社会が多分、その極に達してゐると思われまゝ。ほとんど他己が働かなくなり、光は自己への執着によつておおいにかくされてしまつてゐます。

どうすればよいのでしょうか。

それが最後の「あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい」といふ部分になります。この部分も、私が読んだ五種類の解説書は、私から見ますと、間違つて解説してゐるように思われまゝ。

これまでのキリスト教の解釈では、それは自分の光ではなく、神の光を受けて、神のご栄光を反射するだけだとしてゐます。つまり、太陽の光を受けて月が光るようなものだとしてゐるのです。

月のような「物」が光るのは、その通りでよいのですが、「人」が光るのはそうではありません。人は、太陽（大日如来）の光をうけて物理的には光ることができませんが、心は光ることはできないのです。自ら光つてゐると思ふことはできませんが、本当は光つてゐないのです。

本当に自らが光るためには、ただ、私たちが神や仏を中心に宿してゐると言われ、その理論を理解してもダメなのです。それは、パウロで言ひますと、精神に神が宿つてゐると、口で言うだけに過ぎないのです。まだ、肉体には悪魔を宿してゐるのです。

私が説いてゐますことも、すべてそうです。この『こころのとも』を読んで、「分かつた」と納得してもダメです。あたまで分かつててもダメなのです。あたまだけで

はなく、からだところで分かなければならないのです。そのためには、自己を無にし、自己を捨てた、一日十分か二十分でいいのですが、毎日まいにちの修行が要ります。自己のはからいを捨てて、あるがままにならなければ、ダメなのです。

かつて、私は、坂村真民さんの「光る」という次の詩に感動したことがあります。

光る／光る／すべては／光る／光らないものは／  
ひとつとしてない／みずから／光らないものは／  
他から／光を受けて／光る

感動したのは、十年ぐらい前ではないかと思えます。なぜかと言いますと、それは、私が障害児とその母親と出会うまで、私のような人間がなぜ存在しなければならぬのかが分からなかったのです。ところが、出会ってみて、はじめて自分も障害児と同様に、ただ存在を贈られているだけだという実感が湧いて来たのです。坂村真民さんのこの詩が、私のその時の心境によく合っていたからだと思うのです。つまり、私の存在は、障害児の光によつてはじめて照らしだされた思いがしたからなのです。その時、私も、ヨーガを何年かは続けていたと思います。

とにかく、存在の意味に心の底から気づけたのは、こ

のように、障害児と出会ったこと、ヨーガをしていたことが直接的な要因になつていていると思います。

では、なぜ障害児が光を発し、私を照らしたのでしょうか。一度、皆さんご自身でお考え頂きたいと思います。その手がかりは、障害児そのものの人間的な意味です。

最後に、もう一つ光で思い出しますのは、かつて解説しました『老子』の一節です。それは、「和光同塵」という言葉で、昨年（第六巻）の二月号で解説しました。『老子』第五十二章の中に出てきます。お持ちの方は、もう一度読み直してみたいと思います。

人は、自分の中の大日如来と自己（光と塵）が同和するとき、光り輝くことができるのです。それは、大日如来の自己顕現たるあらゆる存在と一体であると感じることもあります。私の理論で言いますと、自己と他己の真の統合がとれるということです。そのとき、自分のために生きる人生は要らなくなり、自分が生きるのはただ他者のためだけであると実感することができるようです。そうなるとき、人は悪をなさず、善をなすことができます。天なる神の摂理をこの地で実践することができるのです。それが、ここで取り上げた「人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになる」ということなのです。

## 自作詩短歌等選

### 正義のこころ

生徒たち  
いじめることが  
卑劣だと  
思う正義の  
こころだになき

### 民主主義の末路

法よりも  
個人の自由  
尊重す  
民主主義なる  
社会の末路

### 子ども尊重

高校生が言う  
タバコを吸って  
いのちが  
短くなるうが  
本人が  
納得していれば  
大人が  
とやかく言う  
問題ではない  
個人を  
尊重せよ！  
子どもの人権を  
尊重せよ！  
大人だって  
吸ってるじゃないか！

### 正しいと思う心

まちがいを  
犯していても  
正しいと  
思うこころの  
悲しかりけり  
成仏するまで成る

### 人に理解できない

分裂病は  
他己が枯れている  
だから  
人に理解できないような  
ことをする

### 勝手なものよ

人たるや  
勝手なものよ  
裁くとき  
自分のことは  
棚に上げけり

### 世間に尽くす

世間を超えて  
世間に尽くす

## 棚上げ

自らの  
感性棚上げ  
人けなす

## 悪をなす

善いことは  
言えても直ぐに  
悪を為す  
衆生悲しや  
気付きもせずに

## 人間とチンパンジー

猿学者・山極寿一氏の話  
チンパンジーは  
一人で食べる  
人間は  
家族で食べる

チンパンジーは  
ちようだい行動をする  
人間はちようだいと  
言わなくても  
持って行ってあげる

## 同じこと

人間が  
人間に  
成らぬなら  
一つで死のうが  
百まで生きようが  
同じこと

人間が  
人間に  
成ったなら  
直ぐに死のうが  
百まで生きようが  
同じこと

## 馬の耳に念仏

釈尊の  
教えと言えど  
聞く耳を  
もたねばただの  
馬に念仏

## 知らぬことなし

井の中の蛙  
大海を知らず  
井の中にいて  
知らぬ  
ということなし

# 自作随筆選

## 宇宙開発

九月二二日（日）の朝六時三〇分のNHK総合テレビ「さわやかインタビュアー」は、金野正人というアナウンサーが聞き手の、宇宙開発事業団、筑波宇宙センター所長の菊山紀彦氏へのインタビュアーでした。

聞いていて、一つ気になることがありました。それは、「将来、宇宙基地を作って、多くの人がそこで生活し、この地球を見ることで、今は、民族や宗教の対立で争い、殺し合いをしているが、地球は一つであり、みんな仲良くしなければならぬことに気付くことができる。だからそうなった時、人類の将来がよりよいものになって行く」という発言です。

多くの人は、その通りと考えられるかも知れませんが、でも、私から見ますと、そんなことで人間が善い人間になれるわけはありません。

宇宙基地を作ること、宇宙を自由に支配できだしますと、ますます、人間はおごって、自己を肥大させるだけです。人類滅亡の日はぐっと近づいてきます。

誰でもが、人を傷つけたり、人に暴力をふるったりすることは悪いことだと知っています。三歳の子どもならもう分かります。

なのに、争いが起こりますと、身体の傷つけ合いが行われ、命の奪い合いがなされます。

今や、地球は一つで、運命共同体であることは、オゾンホールの拡大や、酸性雨による他国の森林・湖沼の枯れ死に、熱帯雨林の大量伐採による地球規模での天候異変、化石燃料の大量消費による炭酸ガスの蓄積と地球温暖化、などを見てもハッキリと分かることです。

しかし、未だに、地球上では、昔は当然でしたが、今では禁じられている、人権蹂躪（じゅうりん）としての「村八分」が、国際的には経済制裁として堂々として行われていますし、マルクスが命をかけて明らかにした、人による人の搾取は、今や国際的規模でますます盛んになされています。国際的貧富の差はますます拡大していると言えます。

宗教の名で、民族や種族の人権擁護や正義という名目で、他者をふみにじる行為が正当化される限り、人類が一つだといったお題目だけでは、解決できません。地球が一つだと知ったぐらいでは、解決できないのです。それにはどこまでも、ここを磨く修行がいるのです。

# 釈尊のことば（五一）

法句経解説

## 第一章 ブッダ

（一七九）ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの境地は、ひろくて涯（はて）しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘（いざな）い得るであろうか？

（一八〇）誘うために網のようにからみつき執着をなす妄執は、かれにはどこにも存在しない。ブッダの境地はひろくて涯（はて）しがない。足跡をもたないかれを、いかなる道によって誘（いざな）い得るであろうか？

まず、ふつうは釈尊のことをブッダ（仏陀）と言いますが、ここでは、釈尊が自分のことについて自分で言っている訳ではありません。このブッダとは「さとったひと」という意味です。

この偈に似た偈はすでに出てきました。一昨年（第五巻）九月号で取り上げました、（一〇四、一〇五）です。それは、次のようなものでした。

（一〇四、一〇五）自己にうち克つことは、他の人々に勝つことよりもすぐれている。つねに行かないをつしみ、自己をととのえている人、このような人の克ち得た勝利を敗北に転ずることは、神もガンダルヴァ（天の伎楽神）も、悪魔も、梵天もなすことができない。

これらの偈は、いずれも、ブッダ、あるいは、自己をととのえている人が得た勝利を敗北に転ずるような誘惑はどこにも存在しない、ということを行っています。

なぜなら、「ブッダの境地はひろくて涯（はて）しがなく、足跡をもたない」からだというわけです。

この意味はなかなか難しいように思われます。まず、「ブッダの境地はひろく涯しがない」とは具体的にはどのような意味なのでしょう。「広い」という形容詞は、多くは空間を形容するのに使われます。ということは、無限の宇宙に広がっているということを行っているのだと考えられます。また、「涯しがない」と言いますのは、空間にも使いますが、時間にも使つと思えます。つまり、「ブッダの境地は、ひろく涯しがない」とは、心が、空間的にも時間的にも、無限で永遠の世界にしていることを言っているのです。それは、「あなたのお歳は？」と、きかれて、「如来さまと同じ年です」と答える境地なので

す。大昔からずっと生き続けているように感じますし、また、死んだらどうなるかと、明日のことが気にならない境地だと言えます。

では、次の「足跡をもたない」とは、どんなことを言っているのでしょうか。この言葉も既に、出てきました。一昨年（第五巻）六月号の（九二）と（九三）です。それは、次のようになっていました。

（九二）財を蓄えることなく、食物についてその本性を知り、その人々の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれらの行く路（＝足跡）は知り難い。

空飛ぶ鳥の跡を知りたいように。

（九三）その人の汚（けが）れは消え失せ食物をむさばらず、その人の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれらの足跡は知りがたい。空飛ぶ鳥の跡の知りがたいように。

さて、「足跡をもたない」ということですが、意味は、この世に執着するものがない、ということを行っていると思います。

執着のない人を誘惑することは、とても不可能なことです。人は自分の情動（食欲、性欲、優越欲などの欲望や快苦喜怒哀楽などの情緒や気分など）に執らわれて、悪をなします。いくら理性と呼ばれる認知 言語の働き

が発達していても、情動の制御ができなければ、いくらでも悪をなしてしまうのです。情動の誘惑を断ち切ることはできないのです。たとえば、精神（認知 言語の働き）に神が宿っていても、自分の肉体（情動 感情の働き）に悪魔が宿っている、と言って為した悪の言い訳をしなければならぬのです。

最後に、（一七九）の「この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。」という部分を誤解される方があるかも知れませんが、解説しておきます。

この文章は、だれも彼が克ち得たような境地（勝利）に達することができない、といっているのではないということです。そうではなく、彼の克ち得た勝利を敗北に転ずるようなことをする位置には、誰も達することはできない、と言っているのです。「神もガンダルヴァも、悪魔も、梵天も」達することはできないと言っているのです。

パウロの説いたキリスト教では、人間は神の境地には決して達することはできない、とされています。でも、仏教ではそうではありません。七仏通戒偈というのがありますが、それは、過去にいた七人のブツダが共通して説いた偈という意味です。修行によって、誰でもが、ブツダと同じ境地に達することができるのです。そのこと

をここで取り上げた偈も、礼賛（らいさん）しているのです。

（一八一）正しいさとりを開き、念いに耽り、瞑想に専中している心ある人々は世間から離れた静けさを楽しむ。神々でさえもかれらを羨む。

さして難しい言葉はありません。でも、ここに詠まれた境地は、なかなか理解できないと思います。

これと似た偈は、一昨年（第五巻）八月号で取り上げました。次のものがそれです。

（九八）村にせよ、林にせよ、低地にせよ、平地にせよ、聖者の住む土地は楽しい。

（九九）人のいない林は楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛着なき人々は楽しむであろう。かれらは快樂を求めないからである。

正しいさとりを開いた人、念いに耽り、瞑想に専中している心ある人々、聖者、愛着なき人々、こうした人はこの世に執着をもっていません。ですから、一人でいても淋しいとは思いませんし、誰の消息も知りたいとも思いません。親でも子でも兄弟でも、誰であろうともです。また、自分のための余技をしたいとも思いません。つま

り、趣味と言われるようなことをしたり、気晴らしをしたり、テレビを見たり、新聞を見たり、映画を見に行ったり、おいしいものを食べに行ったり、お酒を飲みに行ったり、などしたいとも思わないのです。

また、よい家に住みたいとも、よい服を着たいとも、よい車に乗りたいとも、思いません。また、何かを蒐集して、飾りたいとも、財産にしたいとも、思いません。

それなら無気力・無関心で、何もする気が起こらないのかと言いますと、まったく逆で、常に気力は充実しています。しなければならぬことは、すぐすることができま。しなればならないのに、する気が起こらないということはありません。満足感が身体中に満ちあふれているのです。ただ、何かをしたいのは、他者のためになることをしたいだけなのです。でも、それにもこだわりません。それが、かなわなければ、不幸だということもないのです。

誰でもこうなれますが、でもこうなるには、そうなるうと思っただけではダメなのです。普通の人は、たとえ善をなそうと思っても、知らないうちに悪をなしてしまっています。現代人は悲しいかな、それに気づきもしません。いつも言いますように、一日十分でもいい、毎日まいにちの修行・精進がいるのです。

後記

一、家の周辺の田んぼでは、いま稲刈りがはじまっています。乗って操縦するコンバインで、刈っています。はげにする人はありません。乾燥機で乾燥するようです。今は、段当たりにかかる労力は、昔に比べてとても少なくなっています。でも専業農家でやっていくには、五町歩ぐらいの水田を作らなければダメだと言います。こちらでは、六反ぐらいが昔は普通だったのでしょうか。

二、お借りしている、田、畑のげしや池の土手などのかや（すすき）を刈って、束ね、ぐる（棒を立て、それに巻き付けて露天で保存するもの）にしています。かつて住んでいました徳島県の山城町では、みんながかやを刈って、そうしますが、こちらでする人は誰もいません。山城では、かやは、昔は家の屋根もそれで葺きましたし、今も肥料として欠かせません。私は、いまのところ水田を作っていますので、稲わらがありません。ですので、作物の下に敷いたり、有機農業をするためにもかやが必要なのです。

三、九月三十日に、鳴門教育大学の研究紀要に「知的障害児の社会・生活行動（ ） 新版S M 社会生活能力検査に見られる養護学校の実態とその意味」という論文を投稿しました。「障害は個性」だとする、いま広

がっている考え方に対する批判も載せました。この考え方は、それを唱える人の意図とは逆に、障害児・者はますます住みにくい世になっていくと思われそうです。ご希望があれば、投稿原稿のコピーですが、差し上げます。ご遠慮なく、お申出下さい。

四、予定通り九月九日、十二日、岡山県奥津町の民宿に勉強合宿に行つて来ました。奥津町は過疎とダム建設で、人口減少が激しく、小学校も一校に統合されています。空いた小学校があり、施設によいと思つて、役場へ行き、話をしてきました。選択肢の一つにしておくと言つて下さいました。ご縁ができればよいのですが。

月刊 こころのとも 第七卷 十月号 (通巻 八十二号)	平成八年十月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひびきのさと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

